

絵本『100万回生きたねこ』試論

——幾多の反転を内包する物語——

白瀬浩司

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2017年5月29日受付、2017年7月13日受理)

1. 死が先か、生が先か

「おれは、100万回も しんだんだぜ！」——『100万回生きたねこ』（講談社、1977年）という^{タイトル}標題とは裏腹に、主人公である^{トラネコ}虎猫の口から得意げに語り出され、強調されるのは、死だった。ついでながら、白猫を軽んずるがごとき「きみは まだ 1回も 生きおわって いないんだろ」という発話もまた、生の終わり——すなわち死の側を重く見なすものとなっている。

生と死は^{ついで}対をなしており、表裏一体なのだから問題ないと捉える向きもあろうが、それでもなお、本作品を読み解くにあたり、死の側に比重のある当初の語り口には、注意を払っておく必要があるようだ。というのも、物語の冒頭の時点で、語り手もまた、

100万年も しならない ねこが いました。

100万回も しんで、100万回も 生きたのです。

と語りはじめることで、その方向づけに加担しているのだから……。

確かに、〈しならない〉は、生きている、の^{いい}謂となる。だが、〈100万回も しんで、100万回も 生きた〉というのは、厳密に言うと、まず1回目の生の後に1回目の死があるわけだから読者は多少の違和を感じるはずである。したがって、^{しょうじ}生死の^{いつつ}一対なることを理由に、

100万年も 生きた ねこが いました。

100万回も 生きて、100万回も しんだのです。

と語り改めたとしても全く同義であると解することは、この物語の場合、できない。冒頭に置かれたわずか2文が、^{まっ}虎猫の運命に^{まっ}纏わる予言のごとく本作品の向かう行き先（展開と結末）を既に指し示しているからである。

のみならず、前半部を^と締め括るあたりで、語り手は〈ねこは しぬのなんか へいきだったのです〉と、さらに言い添えてくる。誰もが恐れる死を、自分は恐れやしない。この点だけに、おそらく虎猫は、他者に対する自身の^{みだ}優位を見出していたのだと言えるだろう。

2. この絵本をめぐる言説——先行研究から個人感想まで

絵本を前にするとき、研究者であれ、保育・教育実践者であれ、園児・児童・生徒・学生であれ、全ての老若男女が、ひとりの読者として横並びのはずである。登場者や場面描写、

あるいは物語展開に対して抱く感想や意見も基本的には同様だと私は考えている。だとすれば、とりあえず、この絵本が《死》と《生》と《愛》にかかわる物語だという点は、誰が読んでも首肯しうところだろう。

ちなみに、2013年に売り上げ200万部を突破した¹⁾ という本作品について、鍛冶谷静²⁾ が2013年3月時点の物販サイトamazonにおける本作品のレビュー数を244件と記していたが、2017年5月現在、その数は363件となり、刊行後40年を経たいまなお、読み継がれていることが窺える。

同絵本の物語構成も含めて、生田美秋³⁾ は次のように述べている。先の3つの鍵言葉^{キーワード}が網羅されていることは、言うまでもない。

物語は前半で「100万年も 知らない ねこがいました。100万回も しんで、100万回も 生きたのです」と、愛される飼いねこの時代を描く。後半では、自分が一番大切な野良ねこ時代を経て、白いねこに出会い、自分より大切な存在となる家族を得、やがて愛する白いねここと死別し自らも死を迎える、愛することを知る時代を描く。飼いねこの時代は自分の人生ではなく、飼い主のものだった。愛されることと愛することの違いを巧みに表現、一編の小説を読み終えた後のような充実感で満たされる。

加藤久美子⁴⁾ が〈一匹のねこが生きる姿を描くことで、なぜ生まれたのか、なぜ生きるのかを私たちに問いかける〉と説くほか、朱通節子⁵⁾ が〈幸福とは何だろうと、強烈に問いかけ、自由がなぜ必要か、さらに、生きるとは何なのか、死とは何か……を、問いかけてくれる〉と述べ、村中李衣⁶⁾ が〈当時の大人たちは、単に子どもを楽しませるだけの絵本でなく、人の愛し方、幸福な人生とはどんなものかを伝えてくれる絵本だとして、おおいに歓迎した〉と記すように、《幸福》や《自由》を先の鍵言葉に言い添えてもよいだろう。

また、今野公美子⁷⁾ が中学生を、佐々木忠夫⁸⁾ が高校生を、藤野彰子⁹⁾ が大学生を対象に、本作品の感想をまとめさせており、この三者が用いた生徒・学生たちの素直な感想を、本稿でも物語読解の指標として、適宜、引用する。まずはいくつかあげてみる。

中学生の感想には〈僕がもし100万回生きられたらいろんなことを試したいし、夢が実現するまで生き返る〉、〈どんなに何回生き返っても、本当に大切な人生を生きれば一回でいい〉といった相反するものが見受けられた。高校生の感想に〈生き物は人生に満足しなければ本当の死を迎えることはできないのではないかと思います。〔中略〕しかし、ある一匹のねこを愛し、愛され、自分も好きになり、人生に満足できたので、再び生き返ることなく、死んでいったのではないかと思います〉と、虎猫の最後の死の意味に迫るものもあり、大学生の感想にも〈死の話しをしていると生の話しになり、どう死ぬかはどう生きるかであり、ひとりひとりの課題である〉、〈猫は初めて自分以外に興味を持ち、自分以外を大切にすることができ、後悔のない人生が送れた〉、〈自分らしく生きて死ぬということは私にとっては自分の思うように生き、自分の生き方に満足し、安らかに死ぬことである〉など、やはり作品

の核心に触れるものが見受けられる。

ちなみに、よく引用されるものだが、作家である佐野洋子¹⁰⁾自身は、後年、本作品について次のように書き記していた。

ゆるやかに崩壊していった家庭を営みながら、私は一冊の本を創った。一匹の猫が一匹のめす猫にめぐり逢い子を産みやがて死ぬというただそれだけの物語だった。「一〇〇万回生きた猫」というただそれだけの物語が、私の絵本の中でめずらしくよく売れた絵本であったことは、人間がただそれだけのことを素朴にのぞんでいるという事なのかと思わされ、何より私がただそれだけのことを願っていることの表われだった様な気がする。(85)

彼女の実感する通り、〈ただそれだけの物語〉を、まさしく読者が〈素朴にのぞ〉み、当時の作家自身が〈願って〉もいたということであろうか。村中¹¹⁾は、先の言説に続けて次のごとく述べてもいた。〈ただそれだけの物語〉が有する図式の簡明ゆえの力強さと、それゆえに合わせ持った不十分性の指摘である。

一匹のとらねこの姿を借りて自己受容の過程を語るその試みは確かに絵本の世界において、画期的なものであった。しかし、その自己受容の図式はあまりにもわかりやすいものであった。つまり、自分のことだけが大好きで、だれに可愛がられようと、どんなにちやほやされようと、だれのことも愛さなかつたとらねこが、一匹の白いねこに出会ったとき、はじめて「そばにいたい」と思い、「いつまでも生きていたい」という生への執着心をみせたのは、彼にとって、白いねこがはじめての「他者」であり、自分を映し出す鏡になってくれたからだ、ということ。〔中略〕／しかし、『一〇〇万回生きたねこ』では、自己受容の過程にもいくつかのステージがあること、そして、そのことと分かちがたく他者受容の過程にもいくつかのステージがあることは、語られていなかった。自分という存在をどう受け入れていくのか、そのなかでどう他者と向き合っていくのか、それほどわかりやすい図式では示せない〔後略〕。

3. 本作品が内包する幾多の反転について

ところで、〈反転〉とは、『広辞苑』第六版(岩波書店)によれば、〈①ころぶこと。ころばすこと。②ひっくりかえること。ひっくりかえすこと。③反対の方向に向きかわること。また向けかえること〉となっている。本稿の副題を〈幾多の反転を内包する物語〉としたのは、次のような指摘を踏まえてのことだった。

まず、寿卓三¹²⁾は、このように述べている。

この絵本には実に不思議な感覚、日常の私たちの死生観とは真逆とも思える感覚が示されている。私たちは一般に、死を厭い不死を願う。その意味では、このねこが100万年も生きたことはうらやむべきことだとも言える。それにもかかわらず、ここでは「100

万回もしんだ」ことを自慢するねこのありようにどこか滑稽さを、そしてなにか不幸なおいを感じてしまう。そして、ねこが最後には完全な死を遂げもはや生き返らないことを、ねこの生の成就であり喜ばしい出来事として受け取る。つまり一般に私たちが悲しむべきこととしている死を、私たちは幸せな出来事として受容するのである。／この作品は、死を不幸と見なして不死を求める私たちの日常的感觉を、見事にひっくり返している。

さらに、角田光代¹³⁾の言説を引いておこう。

そのぜんぶが絵本らしくない、と思った。そのときの私は、絵本を、この本とは真逆のものだと思いこんでいたのだ。わかりやすくかわいらしくて、(よほど特殊なものでないかぎり)死や否定の言葉は書かれておらず、真実を突きつけてこない何かだと。この一冊は、その思いこみをぜんぶひっくり返した。／そしてもうひとつ、この絵本がひっくり返すものがある。この絵本を読む以前、私はずっと、生まれ変わりたいと思っていた。ねこが何度もねこに生まれ変わるように、私も、私でなくともいいから人間に生まれ変わりたいと思っていた。心から愛する人に、何度でも会いたいと思っていた。それが幸福のひとつの概念だった。多くの人はそうなのではないかと思う。でも、本当にそれが幸福なのかと、この絵本は真つ正面から問うてきて、私は答えがよくわからなくなる。ずっと考え続けて、今もわからないままである。

両者の指摘は、本作品が内包する幾多の反転の中のほんの一部に過ぎない。本稿では、物語の順次性にしがたって作品の構造を確認しつつ、絵本『100万回生きたねこ』が内包する反転の構造を^{すく}掬い上げていくことにしたい。

4. 虎猫の想い——〈きらい〉と〈だいきらい〉

何度も生まれ変わる過程で、虎猫は様々な飼主に出会う。語り手が例示したのは、①王様、②船乗り、③サーカスの手品師、④泥棒、⑤老婆、⑥少女である。それぞれの飼主に対する虎猫の想いは、

《あるとき、ねこは のねこでした。ねこは、 なんか きらいでした。》

というフォーマットでもって、繰り返し語られていく。

- ① あるとき、ねこは のねこでした。ねこは、 なんか きらいでした。
- ② あるとき、ねこは のねこでした。ねこは、 なんか きらいでした。
- ③ あるとき、ねこは のねこでした。ねこは、 なんかきらいでした。
- ④ あるとき、ねこは のねこでした。ねこは なんか だいきらいでした。
- ⑤ あるとき、ねこは、 のねこでした。ねこは、

なんか だいきらいでした。

- ⑥ あるとき、ねこは 小さな女の子のねこでした。ねこは、子どもなんか だいきらいでした。

この6つが物語の前半部に描かれた虎猫をめぐる関係性であり、相手に対する彼の思いだった。その過程で〈きらい〉は〈だいきらい〉へと変異する。

高校生の感想に〈「王さまなんか」や「海なんか」「サーカスなんか」という「なんか」に込められたねこの気持ちと、その対象物の広さには驚きました〉というのがあり、これは、〈「なんか」から、猫の当たり散らしたい気持ち、悶々とした猫の内面が想像され〉るという福田隆義¹⁴⁾の言や、〈「～なんか」という突き放した言い方には、自分にとって、その対象は深い意味のないものだぞっていう、拒否感をベースにした感情の表明がある〉とする芥川敏子¹⁵⁾の言とも響き合うものである。

中学生の感想に〈ねこはいろいろな人が嫌いだった。なのに逃げなかったことがえらいです〉というのがあった。確かに、絵に描かれた様子を見るかぎり、虎猫はずっと檻に閉じ込められたり、紐や鎖で繋がれたりしていたわけではない。にもかかわらず、そんなに嫌いな飼主のもとから、なぜ逃げ出そうとしなかったのであろうか。

物語前半部における飼主を否定する〈なんか〉は、既に第1章に引用した〈ねこは しぬのなんか へいきだったのです〉という語りへ^{しゅうれん}収斂していくことになる。〈王さまなんか、船のりなんかの「なんか」と、同じ思いが託されているように思います。飼い主の意のままにしか生きられなかった猫、死ぬことさえも自分では決められなかった猫の、孤立・鬱屈・あきらめ・捨てばち、そんな思いのつぶやきではないでしょうか。ここに位置づけられた「しぬのなんかへいき」という言葉にはうつろな響きさえあります〉と、福田¹⁶⁾は述べている。

〈自分の生き方に満足してなくて、なんかかわいそうに見えた〉という中学生の感想もあったが、自分の思うままの生を生きられない飼猫の状態を物語後半部（野良猫の状態）に照らしつつ言えば、いまの生の状況から逃げて得たいほどの何かを持ち合わせていなかったということだったのである。自身の存在に意義を見出せず、生そのものを肯定する感覚すら彼にはなかったのだろう。

なお、〈きらい〉と〈だいきらい〉との隔たりを、鈴木益弘¹⁷⁾は〈王様が童話の世界の常連であるなら、船乗りも常連〉で、〈サーカスに出てくる人々は、子どもにとって怪奇な世界〉の住人であるのに対し、泥棒と老婆と少女の〈三者は、小さな読者にとって身近なもの〉である点に見ている。そして、千葉孝一¹⁸⁾は、〈飼い主達には職業とジェンダーによって、明確な序列がつけられている〉としつつ、次のように説く。

後半、「だれのものでもない」「のらねこ」として転生した時、ねこは初めて「男生」を生きることになり、自分を「すき」になることができた。それまでねこは、ジェンダーとしては女性の人生＝「女生」を強いられていたのである。

が本作品における次なる反転であり、この大好きな対象としての自己の発見が、さらに大好きな他者の発見へと結びつくことになる。

ところで、出会ったときの白猫は、虎猫に〈見むきも しない〉唯一の雌猫だった。

どんな めすねこも、ねこの およめさんに なりたがりました。／大きなさかなを
プレゼントする ねこも いました。上等のねずみを さしだす ねこも いました。
めずらしい またたびを おみやげにする ねこも いました。りっぱな とらもよう
を なめてくれる ねこも いました。／ねこは いいました。／「おれは、100万回
も しんだんだぜ。いまさら おっかしくて！」

という他の雌猫たちの描写とは対照的な姿、

たった 1びき、ねこに 見むきも しない、白い うつくしい ねこが いました。
でもって立ち現れてくる。彼女に働きかけた虎猫とのやりとりの箇所を抜き出すと、次のよ
うになっている。ただし、引用⑥は、両者が一緒に過ごすようになり、やがて子どもが産ま
れ、成長を見届けた後に会話を交わす場面である。

- ④ ねこは、白いねこの そばに いて、／「おれは、100万回も しんだんだぜ！」
／と いいました。／白いねこは、／「そう」／と いったきりでした。
- ⑤ つぎの日も、つぎの日も ねこは、白いねこの ところへ いて、いいました。
／「きみは まだ 1回も 生きおわって いないんだろ」／白いねこは、／「そう」
／と いったきりでした。
- ⑥ ある日、ねこは、白いねこの 前で、くるくると 3回 ちゅうがえりをして い
いました。／「おれ、サーカスの ねこだったことも あるんだぜ」／白いねこは、
／「そう」／と いったきりでした。
- ⑦ 「おれは、100万回も……」／と いいかけて、ねこは、／「そばに いても いい
かい」／と、白いねこに たずねました。／白いねこは、／「ええ」／と いいまし
た。／ねこは 白いねこの そばに、いつまでも いました。
- ⑧ やがて、子ねこたちは 大きくなって、それぞれ どこかへ いきました。／「あ
いつらも りっぱな のらねこに なったなあ」／と、ねこは まんぞくして いい
ました。／「ええ」／と、白いねこは いいました。

加藤¹⁹⁾は〈自分と全く違った生き方をする突然現れた白いねこ。白いねこは、ねこにと
って、初めて現れた意味ある他者であった〉とし、福田²⁰⁾は〈自分の過去を自慢している
限り、思いは通じません。「そばにいてもいいかい」と尋ねる姿勢に変わったとき、白猫は
初めて「ええ」と反応。対話を保障する、相互変革があったからでしょう〉と述べた上で、
子猫の成長を見守る両者を〈真の対話が交わせる、猫と白猫の仲になってい〉ると見なす。
山中康弘²¹⁾もまた、虎猫にとっての白猫との出会いの意味について、

ネコは、粹がってクルクルと宙返りもできるし、百万回生きたぞというのだけれど、

白ネコは「そう」というだけで問題にしない。ところが白ネコの近くにいると気持ちがいい。なにかが動くのです。そして「そばにいてもいいかい」「ええ」。要するにははじめは自分の価値観とは違うものに突き当たるわけですが、そこを^{こころ}通って、アニマというものに至ります。(中略) 男性はこのアニマ(女性はアニムス)と出会っていく。それが結合(コンユクチオ)です。ユングの言う、対立の統一ですが、たとえば男と女の対立といっても、単に表面的な男女間の争いではありません。まったく世界の違う、質の違うものとの結合なので、そこから新たなる可能性が生まれてくる。その中で結局「一回だけの人生」「自己」というものを実現していく。

という把握を示している。

6. 注がれた愛の行方——悲嘆と埋葬

虎猫の死に直面し、その喪失を嘆く飼主たちの姿は、

《は、ねこをだいて なきました。そして、に に を めました。》

というフォーマットでもって、繰り返し語られていく。

- ① 王さまは、たたかいの まっさいちゆうに、ねこをだいて なきました。王さまは、せんそうを やめて、おしろに、帰ってきました。そして、おしろの にわに ねこを めました。
- ② 船のりは、ぬれた ぞうきんのようになった ねこをだいて、大きな声で なきました。そして、遠い みなと町の こうえんの 木の下に、ねこを めました。
- ③ 手品つかいは、まっふたつに なってしまった ねこを 両手に ぶらさげて、大きな声で なきました。だれも はくしゅかつさいを しませんでした。手品つかいは、サーカス小屋のうらに ねこを めました。
- ④ どろぼうは、ぬすんだ ダイヤモンドと いっしょに ねこをだいて、夜の町を 大きな声で なきながら、歩きました。そして 家に帰って、小さなにわに ねこを めました。
- ⑤ やがて、ねこは 年をとって しました。よぼよぼの おばあさんは、よぼよぼの しんだ ねこを だいて、一日じゅう なきました。おばあさんは、にわの 木の下に ねこを めました。
- ⑥ ぐらぐらの頭に なってしまった ねこを だいて、女の子は 一日じゅう なきました。そして、ねこを にわの 木の下に うめました。

中学生の感想に〈おばあさん以外は全部飼っていた人のミスで猫が死んでしまってかわいそうだなと思いました〉というものがあり、高校生の感想に〈ねこは飼い主のことが嫌いでした。っていう言葉から、このねこは飼い主から愛されていなかったのかなと思いました。私はそんなねこがとてもかわいそうな気持ちになりました〉というものがある。これらは、今

野²²⁾による〈他人のミスで死ぬことへの反感は、生と死の「自己決定権」の問題と関係していないだろうか〉との指摘と響き合う。既に引いた福田²³⁾の〈飼い主の意のままにしか生きられなかった猫、死ぬことさえも自分では決められなかった猫〉という言をはじめ、朱通²⁴⁾もまた前半部を〈飼い主に飼われて精神の自由を持たなかった時代〉と見なす。さらに、芥川²⁵⁾の、

王様、船乗り、手品使い、泥棒、おばあさん、女の子、どの人をとっても悪い人はいません。それぞれに、この「りっぱな」トラ猫を可愛がって、猫が死んだ時には、大泣きしています。けれども、泣くほど可愛がっているはずなのに、誰ひとり猫の気持ちを感じている人はいません。／この猫の「きらい」「大きらい」という言葉を大切に読んでいくと、飼い主たちのエゴイスティックな愛情が見えてきます。一方的な押し付けの生活の中で、いつも猫は死に追いやられています。

という把握や、井筒満²⁶⁾による、

エゴイズムに過ぎないものを「愛情」と思いこみ、子どもたちにそれを押しつけていく親たち。その姿は、「愛情深い」飼い主たちによって自由を奪われ「一〇〇万年の孤独」とでもいうべき状況の中で生き続けざるを得なかったこの作品のねこ（主に作品の前半部）の姿と重なりあってくるのではないだろうか。

といった読解とも繋がることになりそうだ。

とはいえ、その一方で、中学生による〈可愛がった猫が死んで飼い主はかわいそう〉とか、〈どんなに猫を傷つけてしまっても、命の大切さを忘れずにちゃんと土にうめてお墓を作ってあげてやさしい人たちだなと感じました〉といった感想にも耳を傾けてよい。わがままといい、エゴイズムというが、たとえ相互了解的な愛であれ、双方の想いのずれを孕みながら相互誤解とでもいうべき姿で成立しているかも知れないわけだから。飼い主たちが仮に自己本位の愛情を虎猫に押しつけていたとしても、また虎猫がそれを不本意に感じていたとしても、少なくとも100万人の愛が虎猫に注がれたという事実はやはり動かないわけである。

7. 大いなる反転——注がれた愛と涙のフラッシュバック

虎猫がいつまでも一緒に生きたいと願った白猫との別れは、やがて突然に訪れる。傍らで息を引き取った彼女を抱きしめる虎猫の姿（図I）に添えられた語りは次のようである。

ねこは、はじめて なきました。夜になって、朝になって、また 夜になって、朝になって、ねこは 100万回も なきました。／朝になって、夜になって、ある日のお昼に、ねこは なきやみました。／ねこは、白いねこの となりで、しづかに うごかなくなりしました。

そして、ページを繰ると、〈ねこは もう、けっして 生きかえりませんでした〉という1行で物語は終幕を迎えることとなる。

この場面の描写と照応するのが、物語冒頭で語られる次の内容である。

100万人の 人が、そのねこを かわいがり、
100万人の 人が、そのねこが しんだとき
なきました。／ねこは、1回も なきませんで
した。

自分の死に対して恐れも悲しみも抱くことなく、死にゆく自身の眼前で飼主たちの流した涙の意味も知らなかった虎猫が、彼らと同じように愛する対象を喪ってはじめて、わが身に注がれた100万人の涙

を理解したのである。愛する対象の喪失がもたらす怒涛のごとき悲しみ、同時に過去の100万回におよぶ自身の死の光景と100万人もの飼主たちの悲しみを、彼はひとつひとつ思い出し、いまのわが悲しみと重ね合わせていく。のみならず、自分に注がれた愛の記憶もまた怒涛のごとく押し寄せたことであろう。これが物語の結末部に仕掛けられた最後の反転なのであった。転生の能力を有する彼が、もはや次なる生を選ぶことはなかった。



図1 白猫を抱いて号泣する虎猫

8. 大いなる反転のあとに

虎猫が最後の生において愛する意味を知りえたため、かけがえのない一生を終えられたことと、彼が満ち足りてこの世から旅立ったことは、疑いようのないところである。

ただ、私たち読者は、虎猫の心情に寄り添った語り手に案内されて、結末部まで辿り着くわけだから、その語りについつい乗せられて、こう感じさせられてしまっているのではないかと、ふと思う点がある。

例えば、前掲の福田²⁷⁾による虎猫と白猫の間に〈対話を保障する、相互変革があった〉として両者を〈真の対話が交わせる〉仲と見なす理解や、朱通²⁸⁾の〈とらねこは、初めて関心を持つ存在に気づきます。実は、白いねこも、とらねこに関心を持っているのです。しかし、とらねこが自己中心の自慢をし続けている限り、お互いに対話出来ません。対話出来ない限り、相手を認めようとしないう白いねこの強烈な迫力に、とらねこは、まいってしまいます〉など。

だが、白猫の形象は、3回にわたる〈「そう」と いったきりでした〉という反復と、2回の〈「ええ」と いいました〉の反復、そして2度目の「ええ」に続く〈グルグルと、やさしく のどを ならしました〉という描写（文字情報）と、5枚の挿画（絵画情報）から捉えていくほかあるまい。虎猫が自慢ではなく自身の素直な想いを白猫に伝えたことは確かである。しかしながら、白猫の虎猫に対する関心や対話欲求を、私は直ちに読み取ることができない。

さらに、挿画についての把握である。鈴木²⁹⁾は、飼主と虎猫の〈心のズレ〉がそれぞれ別方向を見つめる〈目線〉に現れていると述べた上で、虎猫と白猫については〈宙返りをしながらも、とらねこの目は白ねこに向いている。(中略) 二ひきの心の結ばれたことを、二つの目線の合致は示している〉との把握を示す。芥川³⁰⁾もまた〈「そう」としか答えないシロ猫の姿勢を表して、顔は背けられています。けれども、視線は、トラ猫の視線とピッタリ合っています〉と説くのである。しかしながら、当該の挿画(図II)を確認すると、私には両者の視線は交わっていないように見える。

ところで、白猫の形象については、白猫の態度と発話「ええ」に着目した金山泰子・二宮理佳³¹⁾による次のごとき指摘がある。

他の猫たちが雄猫に媚び、特別扱いする中で、この白い雌猫は、「そう」と返すだけで雄猫に興味を示そうともしない。そして雄猫の「そばにいてもいいかい」という許可求めの質問に対して「ええ」で応じる。文法上は「はい」「ええ」どちらも可能なこの文脈で「はい」ではなく「ええ」が使われていることに注目されたい。「はい」と「ええ」では明らかにニュアンスが

異なる。(中略)つまり「はい」であれば、雄猫の許可求めを敬意を持って受け入れたという印象になるが、「ええ」を使うことにより「あなたは私のそばにいてもいいという判断を下した」というニュアンスが生じていると考えられる。(中略)この「ええ」は単なる応答表現ではなく、話者の判断に基づく相手への意見表明であると考えられる。「見むきもしない」「いったきり」というような表現が使われていることから「はい」ではなく「ええ」が意図的に選ばれていることが窺われる。

白猫の返答が孕むニュアンスが、そばにいることを許しただけで、〈敬意を持って受け入れた〉ことを示すものでないとすれば、もともと両者の対話場面が描かれていないことに加え、両者の対等性も見出せないということになりそうだ。

あるいは、登場者の目線に着目すると、飼主と虎猫の挿画と、白猫と虎猫の挿画に共通する構図のものが見受けられる(図III・図IV)。前後に並ぶ両者(飼主と虎猫、白猫と虎猫)の構図は、それゆえに目線を合わせ得ないものとなっており、このことが互いの〈心のズレ〉を示すものであるならば、飼主と虎猫の間にあるそれを虎猫と白猫の間に看取することも可能であろう。だから、虎猫と白猫の間の対話性のなさを死による隔絶にみる鍛冶谷静³²⁾の



図II 白猫の横で宙返りをする虎猫

指摘を俟つまでもなく、既に生前から両者の間には非対話性が生じていたと言えそうだ。ついでながら、図Ⅲと先の図Ⅰの構図もまた、前面に愛された対象 (A) が配され、背後に愛した者 (B) が相手を抱きかかえる姿を描く点で共通しており、《(A)飼主と(B)虎猫の隔絶》に、《(A)虎猫と(B)白猫の隔絶》を類比することもできるはずである。



図Ⅲ 虎猫を抱く少女



図Ⅳ 虎猫と白猫

第5章に引用した雌猫たちの様子と、第6章に引用した飼主たちの様子のみならず、白猫に心惹かれて、毎日通い詰める虎猫の姿は、愛する対象を求めている点で通底する。そして、その目線の先には、雌猫たちと飼主たちの前には虎猫が、虎猫の前には白猫がいたのである。

かくて、対話的な反応の希薄さや、両者の目線のずれを考え合わせると、実は虎猫はかつての自分と同じ存在に心惹かれ、飼主たちや言い寄る雌猫たちと同じ立場に身を置くこととなったのに対し、白猫は意に添わぬかたちで虎猫に寄り添っていたとも読み取れる。かつての彼がそうであったように。第4章に挙げたフォーマットに合わせて記すならば、

《あるとき、白ねこは とらねこのねこでした。白ねこは、とらねこなんか きらいでした。》となりそうである。

だとすると、虎猫の転生の旅は終わったが、白猫はまだ100万回生きる旅の途中なのかも知れない。双方通行に思えた両者の情交が、実は虎猫側からの一方通行なもので、これまでの彼の飼主たちや彼に言い寄る雌猫たちと同じであったという可能性、これこそが大いなる反転のあとに用意されたもうひとつの反転なのではないだろうか。

※ 絵本および先行研究からの引用における圏点・下線は、引用者が私に施したものである。また、引用中の「/」は改行を表す。

※ 引用文献には、読点「、」がカンマ「,」になっているものがあり、原況通りとした。ゆえに、本稿における両者の混在は、引用ミスや校正ミスでないことをお断りしておく。

注

- 1) 『100万回生きたねこ』200万部突破記念・編集者山田智幸野さんインタビュー（ウェブサイト『絵本ナビ』2013年12月19日付記事）。
<http://www.ehonnabi.net/specialcontents/contents.asp?id=91>
〔2017年4月14日確認〕
- 2) 鍛冶谷静「書評 100万回生きたねこ（作・絵 佐野洋子）——誤読されるテキスト」（『四條畷学園短期大学紀要』第46号、2013年5月）、p.42。
- 3) 生田美秋「愛と人生、生と死を描いた創作物語絵本の傑作『100万回生きたねこ』（生田美秋・石井光恵・藤本朝巳編『ベーシック絵本入門』、ミネルヴァ書房、2013年）p.172。
- 4) 加藤久美子「たった一回生きるために——佐野洋子『100万回生きたねこ』論——」（『学芸国語国文学』第30号、1998年3月）、p.150。
- 5) 朱通節子「『一〇〇万回生きたねこ』の問いかけるもの」（『文学と教育』164号、文学教育研究者集団、1994年3月）、p.20。
- 6) 村中季衣「一〇〇万回生きたあとで——さかな1びきなまのまま」（谷本誠剛・灰島かり編『絵本をひらく 現代絵本の研究』、人文書院、2006年）、p.245。
- 7) 今野公美子「中学生の死生観——絵本の感想の分析による探索的研究——」（『東京女子大学心理学紀要』第1号、東京女子大学心理学研究室、2005年3月）、pp.37-42。
- 8) 佐々木忠夫「絵本『100万回生きたねこ』による国語・英語協同授業」（『みんなで21世紀の未来をひらく教育のつどい——教育研究全国集会2015』外国語分科会レポート、2015年8月。『英語教授法「寺島メソッド」同好会HP』で公開されている。
<http://kigouken.jimdo.com/>〔2017年4月14日確認〕
- 9) 藤野彰子「教員養成課程大学生の死生観に関する検討——童話100万回生きたねこを教材として——」（『教育学研究室紀要—〈教育とジェンダー〉研究—』第12号、女子栄養大学栄養学部教育学研究室、2015年5月）。
- 10) 佐野洋子「二つ違いの兄が居て」（『私はそうは思わない』、筑摩書房、1987年）、p.16。
- 11) 前掲書（注6）、pp.245-246。
- 12) 寿卓三「死と言葉——自他の出会いの可能性への問い——」（『愛媛大学教育学部紀要』第60巻、2013年10月）、p.247。
- 13) 角田光代「私は『真実』を読む」（『この本よんで！』第15巻第4号、2015年11月）、p.50。
- 14) 福田隆義「『一〇〇万回生きたねこ』との出会い」（『文学と教育』176号、文学教育研究者集団、1997年3月）、p.18。
- 15) 芥川敏子「『一〇〇万回生きたねこ』の魅力」（『文学と教育』176号、文学教育研究者

- 集団、1997年3月)、p.13。
- 16) 前掲論文(注14)、P.19。
- 17) 鈴木益弘「ことばと絵のダイナミズム」(『文学と教育』176号、文学教育研究者集団、1997年3月)、pp.25-26。
- 18) 千葉孝一「『100万回生きたねこ』論——不死とジェンダー——」(第26回研究発表大会・発表要旨〔近代部門〕、『日本文学』第55巻第6号、2006年6月)、p.84。
- 19) 前掲論文(注4)、P.152。
- 20) 前掲論文(注14)、P.19。
- 21) 山中康弘『絵本と童話のユング心理学』(筑摩書房、1997年)、pp.46-47。
- 22) 前掲論文(注7)、p.40。
- 23) 前掲論文(注14)、p.19。
- 24) 前掲論文(注5)、p.19。
- 25) 前掲論文(注15)、pp.12-13。
- 26) 井筒満「一九七七年前後をめぐって」(『文学と教育』176号、文学教育研究者集団、1997年3月)、p.9。
- 27) 前掲論文(注14)、p.20-21。
- 28) 前掲論文(注5)、p.19。
- 29) 前掲論文(注17)、pp.24-28。
- 30) 前掲論文(注15)、p.15。
- 31) 金山泰子・二宮理佳「『ええ』の機能に関する考察—文学作品の用例分析を通して—」(『ICU 日本語教育研究』第9号、国際基督教大学日本語教育研究センター、2013年3月)、p.42。
- 32) 前掲論文(注2)、pp.41-42。

An Essay on “*The Cat that Lived a Million Times*”

Koji SHIRASE

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities,
Kyushu Women’s University
1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

ABSTRACT

“*100mankai Ikita Neko*”, or “*The Cat that Lived a Million Times*” is the picture book which was written by Yoko Sano in 1977.

The tabby cat had lived a Million times, but he had never loved anyone. Because he had been loving himself more than everyone. However, he had met a white cat and married, they became the parents of the children, soon. He had got important existences more than himself.

The story of this picture book includes a lot of reversed-viewpoints. Therefore, the aim of this article would be considering about the reversed-viewpoints that the picture book contains.

Key words : picture book analysis, death and life, other law and self-control